

### 3.3.5 立平ぶき及び蟻掛ぶき

#### (1) 標準構法

立平ぶき及び蟻掛ぶきの標準構法は、図 3.3.14及び以下によるものとする。

- i) 吊子の板の厚さは、溝板と同じとする。
- ii) 固定釘は、有効打ち込み長さ40mm以上とし、1つの吊子に2本とする。ここで、有効打ち込み長さとは、垂木に打ち込まれた長さをいう。
- iii) 吊子の長さは、60mm以上とする。
- iv) 力心は、直径4mmの亜鉛めっき鋼線とする。

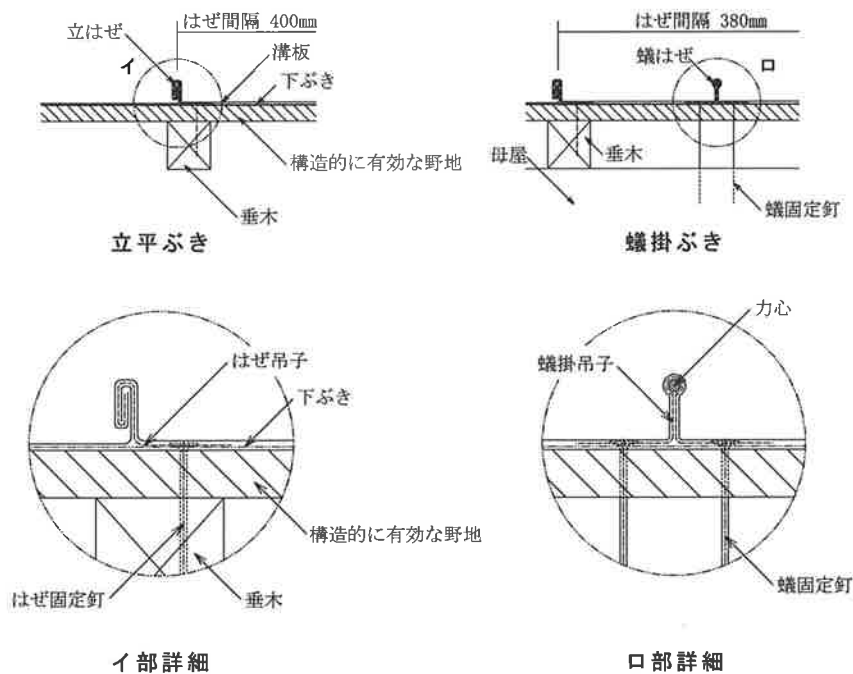


図 3.3.14 立平ぶき及び蟻掛ぶきの標準構法

#### (2) 標準仕様

溝板の厚さ、吊子の間隔及び蟻掛吊子の間隔は、荷重の大きさに応じて表3.3.9から定めるものとする。ただし、けらば納めの端部の長さは、図3.3.15に示すようにはぜ間隔の1/2以下とする。

表3.3.9 立平ぶき及び蟻掛ぶきの標準仕様

荷 重 N/m <sup>2</sup> (kgf/m <sup>2</sup> )	溝板の厚さ (mm)	吊子の間隔 (mm)	蟻掛吊子の間隔 (mm)
2058 (-210)	0.35	225	900
	0.4		
2646 (-270)	0.4		

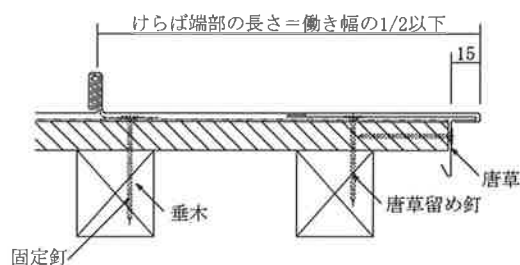


図 3.3.15 立平ぶき及び蟻掛ぶきのけらば納め

## 【解説】

## (1) 標準構法

立平ぶきは、溝板に455mmの鋼板を用いて、はぜ間隔（働き幅）400mmに仕上げるものを標準構法とした。

立平ぶきは、0.5mm以上の板厚のもの、吊子を使わず下地に直接取り付けるもの、かん合タイプのもの等形状が多様化している。それらの構法には、本節に定める標準仕様は適用できない。

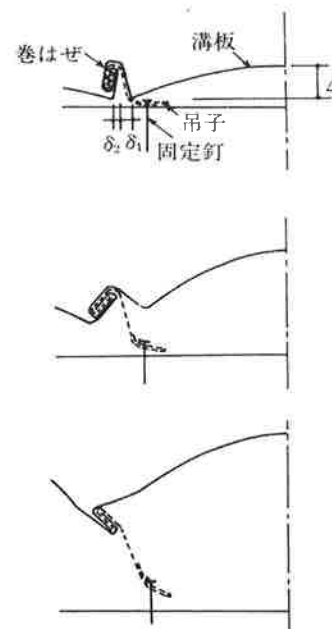
## (2) 標準仕様

立平ぶきに荷重が加わると、次のような過程で破壊する。

i) 荷重を受けた溝板は、浮き上り（ $\Delta$ ）を生じ、溝板両端の溝板の立上り部分は、左右に曲がり、開き（ $\delta_1$ 及び $\delta_2$ ）を生ずる。吊子は若干上方に曲げ上がるが、荷重が零になると変形は元に戻る。最終耐力の1/4程度以下の段階である。

ii) 変形はさらに大きくなる。吊子が上方に引っ張られて、固定釘が抜け始める。この段階では荷重が零になっても変形は元に戻らない。

最終耐力の1/3～1/2の段階である。さらに荷重が大きくなると、固定釘が抜けたり吊子が釘頭から脱けて破壊する。



iii) もし固定釘が抜けず吊子も破壊しなければ、はぜが開いて右図の状態になる。破壊寸前の段階である。

したがって、立平ぶきの耐風強度を高めるには、次のような対策が有効である。

- ・ はぜ組の精度を高くする。
- ・ 溝板の板厚を大きくする。
- ・ 溝板を唐草に充分つかみ込む。
- ・ 唐草を折り下げ唐草とする。
- ・ 働き幅を狭くする。